

第4章 空襲を受けた大分

航空機による爆弾の投下や機関銃の攻撃を「空襲」と言います。

1945(昭和20)年3月、大分市は初めてアメリカ軍による空襲を受け、海軍航空隊の基地や戦闘機の製造・整備などを行う航空廠などの軍事施設のほか、日豊・久大・豊肥本線の鉄道などが空襲の標的となりました。

その後も大分市は何度も空襲を受け、特に1945(昭和20)年7月16日夜半からの空襲では、火災を起こすことを目的につくられた焼夷弾が約6000発も落とされました。市の中心部は焼き尽くされ、被害は全焼家屋2,358戸、死者49人、負傷者122人に及びました。その惨禍は「大分駅から海が見えた」と言われるほどで、空襲は8月10日まで連日のように行われ、市内の全戸数の4分の1が失われました。



柱に残る銃弾



防火弾



防空電球



防毒面



防空頭巾

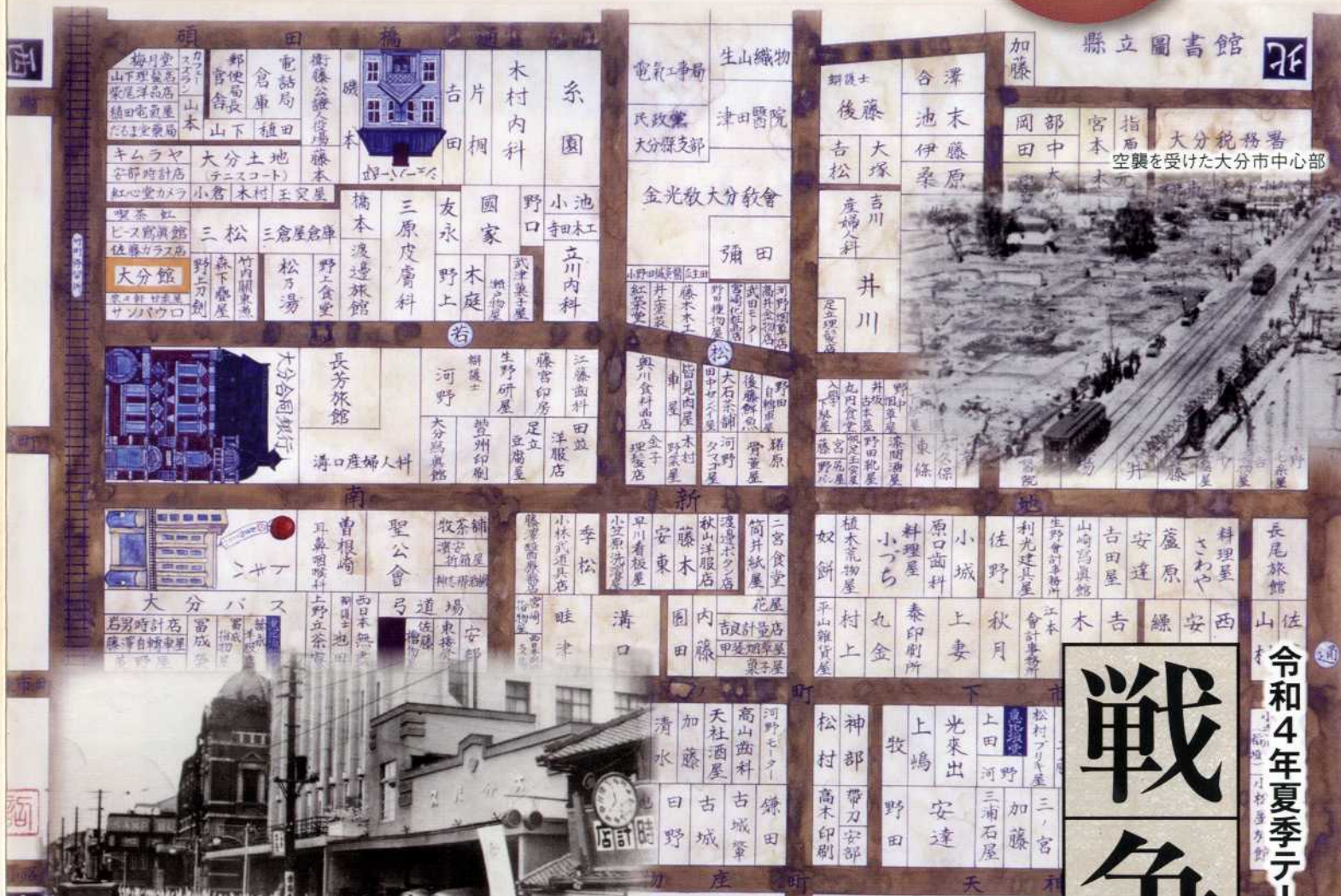
大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース

vol. 129
2022.7.9

戦災で消えた大分中心部復元絵図



中央通りを行進する歩兵47連隊出征兵士

戦争の記憶

令和4年夏季テーマ展示

会期 7月9日(土) ▶
9月5日(月)

発行 大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL:097-549-0880 FAX:097-549-5766

【開館時間】入館は16:30まで 【休館日】※ただし祝日の場合は開館 ※ただし土日の場合は開館 【年末年始の休館日】 【観覧料】※団体は20名以上
9:00-17:00 月曜日(第1月曜を除く) 第1火曜日 祝日の翌日 12/28-1/4 大人210円(団体150円) 高校生100円(団体50円) 中学生以下無料

※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者1名は無料。◎入館時に受付で手帳を提示してください。
※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、予定を変更することがあります。

発行日: 令和4年7月9日

大分市歴史資料館

戦争の記憶

令和4年夏季テーマ展示

今年2月、ロシアによるウクライナへの侵攻が始まりました。終わりの見えない戦況の中で多くの尊い人命が失われ続けています。日本も90年前の1931(昭和6)年に中国東北部で始まった満州事変以後、中国との長い戦争に突入し、さらにアメリカやイギリスなどの国とも戦火を交えました。敗戦を迎えるまでの間、300万人以上の国民が命を落とし、1945(昭和20)年にやっと戦争は終わりました。以後、平和が続いていますが、年月の経過とともに戦争を経験した世代が少なくなり、戦争体験の継承が難しくなっています。今回の展示では、市民の皆様から寄贈を受けた資料を中心に、忘れてはいけない戦時下の日本の様々な側面を紹介します。

第1章 戦争中の暮らし

日露戦争の後、日本はロシアが持っていた満州における鉄道の権益や土地の租借権を手に入れました。その後、1931(昭和6)年、中国にいた日本陸軍は、独断で中国領土の満州に侵攻し満州の大半を占領しました。日本は1932(昭和7)年に満州国の建国を一方的に宣言し、国際連盟から脱退して国際社会からの孤立を深めました。その後、中国との全面戦争に

突入し、1941(昭和16)年には、アメリカやイギリスなどの国を相手に太平洋戦争も始まりました。戦争が始まった当初、国内では戦争の悲壮感は小さく、暗い影を落とすことは少なかったのですが、日中戦争が長引き、さらに太平洋戦争が始まると次第に国民の生活は苦しくなりました。



真空管ラジオ



映画ポスター

第2章 強まる戦時色

1938(昭和13)年、日中戦争が長引く中、人や物などすべてを議会の承認なしで戦争に利用できる国家総動員法が制定されました。この法律により、国は国内の労働力と資源のすべてを戦争のために使えるようになり、「ぜいたくは敵だ」や「欲しがりません勝つまでは」などのスローガンの下、節約が強制されました。さらに、戦争の長期化につれて物不足が深刻になり、国は大都市を中心に米や小麦粉、みそ、しょう油、衣料品などを配給制にし、国民の暮らしは一層苦しくなりました。また、戦況を伝える新聞やラジオには、戦意を高めて国民を戦争に駆り立てるような報道が目立ち、国民に正確な戦況が知らされませんでした。



爆弾の製造「写真週報」



大東亜戦争割引国庫債券



陶製湯たんぼ

第3章 出征する兵士

戦争に動員された男性が兵士となり、戦場に行くことを「出征」と言いました。当時、男性に兵役の義務があり、20歳になれば徴兵検査を受け、合格すると軍隊に入り2~3年間の訓練を受けた後、家に帰り出征する命令を待っていました。戦局が悪化した1943(昭和18)年には、兵力の増強をはかるため、徴兵検査を受ける年齢が20歳から19歳に引き下げられ、翌年頃からは半年ほどの短い訓練期間で出征するようになりました。敗戦まで男性の4人に1人が家族と別れて出征し、そのうちの約230万人が家族の元に帰ることはありませんでした。残された多くの家族は、一家の働き手を戦争で失ってどんな思いだったのでしょうか。



日の丸寄せ書き



陸軍兵士